瀬戸内の新たな魅力に触れる旅へ

瀬戸内。大小さまざまな島々が織りなす多島美と、穏やかな気候、そして豊かな自然に恵まれたこの地域は、古くから人々の暮らしを支え、文化を育んできました。

歴史と伝統が息づく街並み、島々を彩る美しい自然、そして人々の温かさ。瀬戸内には、訪れる人を魅了する、たくさんの魅力が溢れています。

近年、瀬戸内は、新たな魅力で注目を集めています。

アート、食、体験、そして人との出会い。

そこには、まだ知られていない、素晴らしい物語が待っています。

私たち本州四国連絡高速道路株式会社は、瀬戸内に根ざした企業として、人だけでなくそこにある想いも魅力的な橋で本州と四国を結ぶ会社として、この地域の魅力をより多くの人々に知っていただき、地域の活性化の一助になりたいと考えています。

そこで今回は、瀬戸内の新たな魅力に触れる旅へとご案内します。

瀬戸内海を囲む個性豊かなまちや、島々には、まだまだ知られていない魅力がたくさん眠っています。

名前は聞いたことがあるけれど、 一体どんなところなのか、 どんな体験ができるのか、 実はよく知らない、という場所も多いのではないでしょうか？

あるいは、土地や文化のイメージは持っているけれど、 その奥深くに隠された歴史や人々の情熱には、 まだ触れたことがない、という場所もあるかもしれません。

それぞれの地域で自然、歴史と文化、そして人々との触れ合いを通して、 心に残る旅の体験をお届けします。

さあ、私たちと一緒に、瀬戸内海の新たな物語を紡ぎましょう。

（本文は、せとうち観光推進機構さまサイトに掲載させていただきました内容を日本語訳にして再掲したものです。英文については下記サイトをご参照ください。）
Discover the Charms of the Setouchi Region | Authentic Japan: Setouchi

橋が架ける、未来と世界への架け橋：ブリッジワールド

世界最大級の吊り橋「明石海峡大橋」

雄大な瀬戸内海を跨ぎ、本州と淡路島を結ぶ巨大な橋。

それは、世界最大級の吊り橋、明石海峡大橋です。

全長 3,911 メートル、主塔の高さは海面から約 300 メートル。

その壮大なスケールは、見る者を圧倒し、感動を与えます。

明石海峡大橋は、単なる交通インフラではありません。

それは、人々を繋ぎ、地域を繋ぎ、未来を繋ぐ、希望の架け橋なのです。

そして、この橋を舞台に、人々の情熱と地域への愛が生み出す感動の体験があります。

ブリッジワールド：橋の上を歩く感動体験

一般の方が普段は入れない管理用通路を歩き、明石海峡大橋の主塔に登る、特別な体験。

それが、「ブリッジワールド」です。

海上約 300 メートルの主塔からの眺めは、まさに絶景。

360 度のパノラマが広がり、瀬戸内海の島々や、神戸の街並みを一望できます。

ブリッジワールドは、2005 年から開催されている、人気の体験ツアーです。

年間 1 万人以上が訪れ、海外からの観光客も約 15%を占めるほどの人気ぶり。

しかし、ブリッジワールドのスタッフは、現状に満足していません。

「私たちは、ただ橋を案内するだけではありません。橋を通して、地域と世界を繋ぎたいのです。」

そう語る彼らの目は、未来への希望に満ち溢れています。

地域を愛する気持ちから世界へ

ブリッジワールドのスタッフは、明石海峡大橋を、地域の魅力を発信する鍵と捉えています。

「私たちは、自分たちだけが潤えば良いとは考えていません。 橋の魅力を活かして、地域全体を盛り上げていきたいのです。また西日本への観光客誘客の入口になりたいのです。」

その強い思いから、彼らは、地元の神戸市はもちろんのこと、淡路島、そして瀬戸内地域全体へと、送客の輪を広げようと奮闘しています。

そのために、地域との連携を強化し、様々なイベントやプログラムを企画しています。

例えば、地元の図書館との連携事業では、「夏休みの自由研究」プログラムの中で、クイズラリーやワークショップを通して子どもたちに橋の魅力を楽しく知ってもらう工夫をしています。

これは、未来を担う子どもたちに、橋への興味関心を持ってもらい、将来的なブリッジワールドのファンを増やすとともに、将来、地域活性化に貢献してくれる仲間を増やすことも目的としています。

また、地元の宿泊施設や公共交通機関とも連携し、新たなツアー開発にも取り組もうとしています。

将来的には、ブリッジワールドを起点とした、より幅広い観光ルートを構築し、地域全体を盛り上げていきたいと考えているのです。

そして、その活動の幅は、地域だけにとどまりません。

海外からの観光客にも、日本の技術力と、おもてなしの心で感動を与えたいと考えています。

神戸空港の国際化を見据え、多言語対応の強化や、外国人観光客に対応できるガイドの育成にも力を入れています。

敬意を込めて、彼らのことは単にガイドではなく、ツアーリーダーと呼んでいます。

言葉や文化の壁を越えて、誰もが楽しめる橋体験を提供したい。

その一心で、スタッフは日々研鑽を積んでいます。

世界中の人々を笑顔に

ブリッジワールドでは、誰もが安心して楽しめるよう、様々な工夫を凝らしています。

例えば、ツアーでは、誰にでも分かりやすいよう、視覚に訴えるピクトグラムなどを積極的に活用しています。

また、音声ガイダンスを導入することで、外国人観光客でもツアーリーダーの説明を理解し、共感することができます。

しかし、ブリッジワールドのスタッフは、現状に満足することなく、さらなるステップアップを目指しています。

「海外からのお客様にも、もっとリアルに、もっと深く、橋の魅力を体感してもらいたい。」

そのために、同時通訳システムの検討や、インバウンド対応できるガイドの育成にも取り組んでいます。

さらに、将来的には、外国人観光客一人ひとりのニーズに対応した、オーダーメイドのツアーやサービスの提供も視野に入れています。

彼らは、誰もが楽しめるようなガイドの育成を目指しています。

それは言葉のバリアフリーだけではなく、障害のある方にも配慮し、どのように楽しんでいただくかという課題への挑戦なのかもしれません。

すべての人が、安全で快適に、そして心から楽しめるブリッジワールドを実現するため、彼らは日々努力を続けているのです。

明石海峡大橋、そしてブリッジワールドの未来へ

明石海峡大橋は、人々を繋ぎ、地域を繋ぎ、未来を繋ぐ、希望の架け橋です。

そして、ブリッジワールドは、その橋の魅力を最大限に引き出し、世界中の人々に感動と喜びを届ける「ここでしかできない」体験です。

地域との連携を深め、多様な人材が活躍することで、ブリッジワールドは、これからも進化し続けていくでしょう。

そして、明石海峡大橋の素晴らしさとともに、日本の技術力、文化、そしておもてなしの心を、世界へ発信していくのです。

尾道観光協会の挑戦：ガイド育成が生み出す、新たな地域の魅力

サイクルツーリズムの聖地、尾道

広島県尾道市。瀬戸内海に面したこの街は、古くから港町として栄え、坂の街、文学の街、そして映画の街として、多くの人々を魅了してきました。

尾道は、サイクリングの聖地としても知られています。

瀬戸内海の島々を結ぶ「しまなみ海道」は、ナショナルサイクルルートに指定され、国内外から多くのサイクリストが訪れます。

尾道は、しまなみ海道の起点となる街。

サイクリングを楽しむ人々にとって、欠かせない場所となっています。

もちろん、尾道の魅力はサイクリングだけではありません。

文学や映画の舞台となった場所、坂道に沿って建ち並ぶレトロな建物、そして人々の暮らしの中に息づく伝統芸能など、多様な文化が息づく街でもあります。

尾道観光協会は、サイクリングだけでなく、尾道の文化に触れることができるガイド育成にも力を入れています。

ガイド育成の必要性

国内外から観光客が増加する中、尾道では、観光客を案内するガイドの必要性が高まっています。

特に、言葉や文化の異なる外国人観光客にとっては、ガイドは単なる案内人ではありません。

彼らは、異文化理解の橋渡し役として、旅をより深く、有意義な体験へと昇華させる存在なのです。

高付加価値旅行者にとって、ガイドは、特別な旅を創造するための、かけがえのないパートナーと言えるでしょう。

しかし、尾道には、ガイドとして活躍できる人材が不足しているのが現状でした。

ガイドになりたいという人はいても、どのようにスキルアップすれば良いのか、どこで活躍できるのか、情報が不十分だったのです。

ガイドの主体的な活動

そんな中、尾道でガイドとして活躍する人たちが中心となり、「BINGO Guide Network」という組織が立ち上がりました。

彼らは、互いに情報交換やスキルアップのための勉強会などを行い、ガイドとしての質向上を目指しました。

さらに、彼らは、尾道観光協会に相談を持ちかけました。

それは、より質の高い研修プログラムの提供と、活躍の場の確保を求めてのことでした。

尾道観光協会の挑戦

尾道観光協会は、彼らの熱意に応え、研修プログラムの開発に協力しました。

特筆すべきは、尾道市だけでなく、愛媛県今治市とも連携し、広域的な視点でガイドプログラムを実施したことです。

通常、観光協会が県域を越えて活動することは珍しいことです。

しかし、尾道観光協会は、しまなみ海道という広域観光ルートを考慮し、今治市との連携を積極的に進めました。

このチャレンジングな取り組みは、県域を越えて活動できるスルーガイドの育成に繋がり、観光客の満足度向上に大きく貢献しています。

スルーガイドが生み出す、新たな可能性

スルーガイドとは、複数の地域を跨いで観光案内を行うことができるガイドのこと。

しまなみ海道のように、複数の地域にまたがる観光ルートでは、スルーガイドの存在が、観光客にとって大きなメリットとなります。

なぜなら、複数の地域を跨いで観光する場合、それぞれの地域ごとにガイドを依頼する必要があり、時間や費用がかかってしまうからです。

スルーガイドであれば、一度の依頼で、複数の地域を案内してもらうことができ、効率的かつスムーズな観光が実現できます。

さらに、日ごとに新しいガイドと自己紹介から始まる波長合わせを繰り返す必要もなく、一人に信頼して旅を任せることができるという安心感も得られます。

尾道観光協会では、特別にスルーガイドを養成しているわけではありませんが、複数日のツアーに積極的に参加するようになったことで、彼らとかかわったガイドは、しまなみ海道だけでなく、岡山県倉敷市など他の地域でも活躍できる存在として期待されています。

地域の魅力を伝える

尾道観光協会は、ガイド育成を通して、地域の魅力を効果的に発信することにも力を入れています。

例えば、島を拠点に何日もかけて尾道のあちこちを巡るツアーや、地元の人々と交流できるプログラムなどを企画しています。

観光客は、ガイドを通して、尾道の歴史や文化、そして人々の温かさに触れることができます。

持続可能な観光に向けて

尾道観光協会は、観光客だけでなく、地域住民も恩恵を享受できる持続可能な観光を目指しています。

ガイド育成を通して、地域経済の活性化や雇用創出、そして文化保護に貢献したいと考えています。

文化保護とは、単に古い建物や美術品などを保存することだけではありません。

地域に根付く伝統や文化を尊重し、ガイドたちがその魅力を伝えることで、未来へ受け継いでいく。

尾道観光協会は、そうすることで文化保護に少しでも貢献できればと考えています。

さらに、オーバーツーリズム対策としても、ガイドの役割は重要です。

観光客が特定の場所に集中してしまうと、地域住民の生活環境に悪影響を及ぼしたり、観光資源がダメージを受けてしまう可能性があります。

ガイドは、観光客の行動を適切に管理し、地域全体へ観光を分散させることで、オーバーツーリズムによる問題を防止することができます。

未来への展望

尾道観光協会のガイドプログラムは、まだ始まったばかりです。

しかし、ガイドたちの熱意と、地域を巻き込んだ活動は、尾道の観光の未来を明るく照らしています。

活躍の場も広がり、例えば、神姫バスが企画している「日本一長い高級路線バス」では、尾道観光協会と連携したガイドが活躍しています。

これからも、尾道観光協会は、ガイドプログラムを進化させながら、地域の魅力を世界に発信し続けていくでしょう。

城主体験！丸亀城で過ごす特別な一夜

瀬戸内海に浮かぶ石垣の名城

穏やかな瀬戸内海に面した香川県丸亀市。そのシンボルである丸亀城は、400 年以上もの歴史を刻む、雄大な石垣が印象的な城です。

石垣の名城として名高い丸亀城。高くそびえ立つ石垣は、見る者を圧倒する迫力と美しさを兼ね備えています。

近年、この丸亀城で特別な体験ができる「城泊」が話題となっています。

しかし、城泊は単なる宿泊体験ではありません。

それは、歴史と文化、そして人々の温かさに触れる、特別な旅の始まりです。

京極家の legacy を未来へ

丸亀城は、1597 年に築城されました。その後、京極家 が城主となり、城下町が整備されました。京極家は、文化や芸術を大切にすることで知られ、その精神は今も丸亀の人々に受け継がれています。

城内には、江戸時代に建てられた藩邸の建物（の部材を使用して）移築して建てられた延寿閣別館が現存しています。しかし、長年の風雨にさらされ、朽ち果てていく延寿閣別館を目の当たりにした地域の人々は、この貴重な文化遺産を何とか残したいと立ち上がりました。

彼らは、京極家が築き上げた文化を愛し、後世に伝えたいという強い思いを持っていたのです。

そして生まれたのが、「城泊」というアイデアです。

城泊の収益の一部は、丸亀城天守をはじめとする文化財の修復・保存に充てられています。

あなたは、城泊を通して、歴史保存に貢献しながら、城主になったような特別な体験を味わうことができます。

「キャッスル・エクスペリエンス」で特別な時間を

丸亀市観光協会の担当者は、城泊という言葉ではなく、「キャッスルエクスペリエンス」という言葉を使っていました。

それは、単に城に泊まるというだけでなく、丸亀城の歴史や文化、そして人々の温かさに触れる、特別な体験を提供したいという思いが込められているからです。

旅は丸亀駅から始まります。専属のコンシェルジュが、伝統的な人力車とともにお待ちしています。時代を超越したこの乗り物に乗り込み、丸亀城を目指しましょう。午後4時、堂々たる二の門を徒歩でくぐり抜けると、そこは別世界。太鼓の轟くような音色に迎えられ、忘れられない「キャッスル・エクスペリエンス」の始まりです。

そして、伝統を受け継ぐ太鼓奏者による迫力満点の演奏で、あなたを歓迎します。

太鼓の力強い音色は、400年の時を超えて、今もこの城に響き渡ります。

実はこの太鼓、単なる演奏のためのものではありません。

古くから時を告げる役割を担っており、毎日正午には、今も昔と変わらず、太鼓が九回打ち鳴らされます。

「太鼓門」と呼ばれるこの門から響き渡る音は、丸亀城が「音のある城」として、人々の暮らしに溶け込んでいる証です。

江戸時代から続くこの伝統は、城郭で毎日時を告げる太鼓の音が今も残っているという点で、日本でも大変珍しい、まさに文化遺産の継承と言えるでしょう。

城主気分を満喫

客室は、京極家の文化を感じられる、本格的な和の空間に。香川県産の伝統工芸品が、温かみを添えています。

例えば、ベッドライナーには、香川県特産の保多織が使われています。繊細な手触りと美しい模様は、きっとあなたを魅了するでしょう。

夕食は、地元の食材をふんだんに使った、特別なコースメニュー。瀬戸内の新鮮な魚介類や、香川県産の野菜を、熟練のシェフが腕によりをかけて調理します。

なんと、当時を復元した讃岐漆器で召し上がることができるのです。その艶やかな光沢と深みある色合いは、日本の伝統美を感じさせます。

この美味しい食事を引き立てるものとして、香川県内で醸造された地ビールを味わってみてはいかがでしょうか？ 地元のビールは、フルーティーな香りと爽やかな味わいが特徴で、様々な個性的な味が楽しめます。 後ほど、香川県内の様々なクラフトビール醸造所を巡ってみるのもおすすめです。 例えば、フルーティーな香りと爽やかな味わいの「久福ビール」は、魅力的な本島で作られています。 島といえば、丸亀市には様々な島々が点在しており、それぞれに独自の文化や自然があります。島めぐりの旅に最適な場所と言えるでしょう。

これらの品々は、単なる食事やお土産ではありません。丸亀や香川県の職人たちが、伝統の技と心を込めて作り上げた逸品です。

城泊では、それぞれの品にまつわるストーリーや、作り手の情報が記された特別な資料が提供されます。

翌日以降、実際に作り手の工房を訪れたり、作品を購入したりすることで、あなたもこの地域の魅力をより深く知ることができるでしょう。そして、それは、伝統工芸を未来へ繋ぐ、持続可能な社会への貢献にも繋がります。

夜の天守を独り占め

夜は、静寂に包まれた城内で、特別な時間をお過ごしください。

普段は入ることのできない夜の天守には、あなたのためだけに設けられた特別なラウンジがあります。

貸し切りのラウンジでゆったりとくつろぎながら、お酒や軽食を楽しむことができます。

歴史ある天守の中で、特別な時間を過ごしてみてはいかがでしょうか？

うちわ作りで伝統に触れる

翌朝は、うちわ作り体験はいかがでしょうか？伝統工芸士から指導を受けながら、世界に一つだけのオリジナルうちわを作ることができます。

丸亀うちわは、全国シェア 9 割を誇る、丸亀市の代表的な特産品です。その歴史は古く、江戸時代には金毘羅参りの参拝者のお土産として人気を博しました。

伝統の技を間近で見ながら、うちわ作りの歴史や文化に触れてみましょう。

経済情報誌でも、その伝統を守り続ける姿勢と、地域活性化への貢献が高く評価されています。

地域の人々と繋がる

丸亀城キャッスル・エクスペリエンスでは、うちわ職人だけでなく、様々な地元の人々と触れ合うことができます。

例えば、太鼓奏者との交流や、運が良ければ、中津万象園にて庭師から庭園の案内を受けることができるかもしれません。 本場の文化体験を楽しむことができます。

丸亀城で特別な体験を

丸亀城城泊は、単なる宿泊体験ではありません。

歴史と文化、そして人々の温かさに触れ、地域に貢献できる、特別な旅です。

瀬戸内海の秘められた芸術の宝

SETOUCHI MUSEUM NETWORK

瀬戸内海。大小さまざまな島々が織りなす多島美と、穏やかな気候、そして豊かな自然に恵まれたこの地域は、古くから人々の暮らしを支え、文化を育んできました。

近年、瀬戸内海地域は、現代アートの聖地としても注目を集めています。直島や豊島をはじめとする島々には、世界的に有名な美術館やアート作品が点在し、多くの観光客を魅了しています。

しかし、瀬戸内海の魅力は、現代アートだけではありません。

この地域には、長い歴史の中で育まれた、独自の文化や伝統が息づいています。

私たちは、本州四国連絡高速道路株式会社として、瀬戸内海地域の活性化に貢献するため、せとうち美術館ネットワークの活動を推進しています。

せとうち美術館ネットワークは、瀬戸内海地域に点在する美術館や博物館が連携し、地域全体の文化芸術振興を目的とした組織です。それぞれの美術館が独自の特色を持つ一方で、互いに協力し合うことで、より大きな魅力を発信しています。

このプロジェクトでは、せとうち美術館ネットワークに加盟する美術館の中から、特にユニークな魅力を持つ美術館をピックアップし、ご紹介します。それぞれの美術館を舞台に、歴史、文化、そして芸術が織りなす物語を紡ぎ、瀬戸内海地域の隠れた魅力に光を当てます。

（本文は、せとうち観光推進機構さまサイトに掲載させていただきました内容を日本語訳にして再掲したものです。英文については下記サイトをご参照ください。）
Unveiling the Artistic Treasures of the Seto Inland Sea | Authentic Japan: Setouchi

世界の名画を巡る旅へ出発！：大塚国際美術館

「陶板名画」が織りなす、もう一つの美術館

Main Entrance ©The Otsuka Museum of Art

徳島県鳴門市。渦潮で有名な鳴門海峡を望むこの地に、世界中の名画と出会える、特別な美術館があります。

大塚国際美術館。ここは、世界の名画を陶板で原寸大に再現した、「陶板名画美術館」です。

「陶板名画」とは、大塚グループのセラミック技術を駆使して開発された、特殊な陶板に名画を焼き付けたもの。

「美術館なのに、本物の絵がないの？」

そう思った方もいるかもしれません。

しかし、大塚国際美術館は、「単なるレプリカ」の美術館ではありません。

陶板名画は、オリジナル作品の色彩や質感を忠実に再現し、時を超えて退色劣化することのない、永遠の美を追求した美術作品なのです。

企業メセナが生んだ、陶板名画美術館

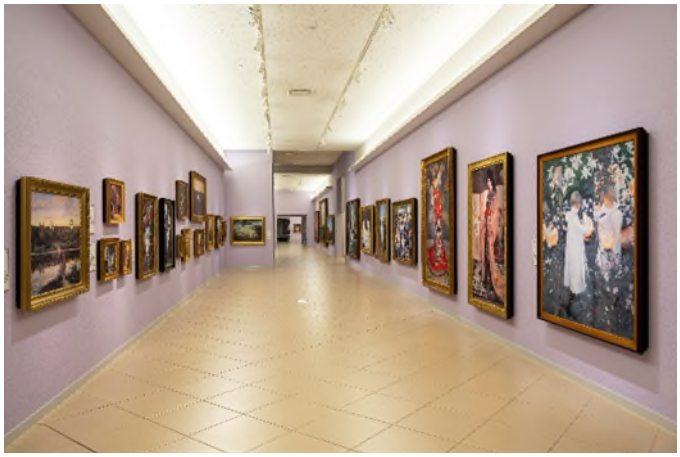
大塚グループは、医薬品・食料品の製造・販売を行う大塚製薬株式会社などからなるグループです。

栄養ドリンクや、ポカリスエットなどの飲料でおなじみかもしれません。

大塚グループは、創業の地である徳島県鳴門市に貢献したいという思いから、美術館設立を計画しました。

1998 年、明石海峡大橋の開通に合わせて開館した大塚国際美術館は、大塚グループの 75 周年記念事業であり、企業メセナ活動の一環として設立されました。

美術館設立の背景：地域への恩返し



Modern Art Gallery ©The Otsuka Museum of Art

「鳴門の白砂は、京阪神にコンクリートの材料として出て行くだけ。この砂で陶板を作り、価値のある商品にできないか。」

初代館長大塚正士氏はじめ社員の方々は、鳴門の資源を有効活用し、高付加価値化することで、地域に貢献したいと考えました。

そして、試行錯誤の末、1 メートル角の大きな陶板を焼く技術を開発。

建材として販売を開始しましたが、オイルショックの影響で需要が激減。

建材以外の用途を模索する中で、生まれたのが「陶板名画」のアイデアでした。

フランスの文化大臣、アンドレ・マルローの著書「空想美術館」を連想させます。正士氏は、世界中の名画を陶板で再現することで、誰もが身近に美術を鑑賞できるようにしたいと考えました。

しかし、美術館設立には、様々な困難がありました。

海外の美術館からの許可取得、そして「陶板名画は複製に過ぎない」という批判の声。

中でも、日本で最初に指定された国立公園の一つである瀬戸内海国立公園内という立地条件による建築制限は、大きな課題でした。

そこで、美術館建設のために山を削り、その内部に美術館を建設した後、再び景観を戻すという、壮大なプロジェクトが実行されました。

そのような制限があるにもかかわらずその地に作った理由は、自然と美術、そして地域への貢献を両立させようとする、強い意志の表れであり、何より、鳴門に沢山の人が訪れてほしいという地域貢献の思いからだったのです。

陶板技術：時を超える、永遠の美

陶板名画は、オリジナル作品の大きさだけでなく、色彩や質感を忠実に再現し、時を超えて退色劣化することのない、永遠の美を追求した美術作品です。

オリジナルサイズの再現、劣化しにくい素材、間近で鑑賞できる、写真撮影が可能、屋外展示など、陶板名画ならではの特長が、美術鑑賞の新たな可能性を広げています。

さらに、驚くべきことに、陶板名画は手で触れることもできます。

「触れても大丈夫なの？」

そう思うかもしれませんが、ご安心ください。

陶板名画は、特殊な技術によって作られているため、優しくであれば触れても劣化しません。

間近で見て、そして触れて、美術作品を五感で味わう。

それが、大塚国際美術館のユニークなところです。

世界の名画を巡る旅

Leonardo da Vinci's "the Last Supper(before and after the restoration)" ©The Otsuka Museum of Art

Sistine Hall ©The Otsuka Museum of Art

大塚国際美術館では、世界 26 カ国 190 以上の美術館から収集された 1000 点以上の名画を、オリジナルサイズで鑑賞することができます。

それは、まるで、世界中の美術館を巡る、壮大な旅。

古代の壁画から、ルネサンス期の傑作、そして現代アートまで、時空を超えた美術の旅を体験できます。

ミケランジェロの「システィーナ礼拝堂天井画及び壁画」も、オリジナルと同じサイズで再現され、圧倒的な存在感を放っています。

また、クロード・モネの「大睡蓮」は陶板だからこそ可能な屋外展示となっており、自然光の中で作品を鑑賞することができます。

レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」は、実物大の迫力と、細部まで忠実に再現された描写に目を奪われます。

修復前の「最後の晩餐」と修復後の「最後の晩餐」を同時に見比べることもできます。

これは、オリジナル作品を所蔵する修道院では決してできないことです。

陶板名画だからこそ実現した、貴重な展示方法と言えるでしょう。

フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」は、滑らかな質感と鮮やかな色彩が、作品の魅力を一層引き立てています。

展示方法：美術史を体感する

Scrovegni Chapel ©The Otsuka Museum of Art

大塚国際美術館では、作品をただ並べるのではなく、様々な工夫を凝らした展示方法で、来場者を美術の世界へ誘います。

例えば、「環境展示」では、古代遺跡や教会などの空間ごと再現することで、作品が生まれた時代背景や文化的背景を体感することができます。

これは、作品を借りて展示している美術館では決してできないことです。

オリジナル作品を所蔵する古代遺跡や教会などでは、作品をその本来の展示環境から移動させることはできません。

しかし、陶板名画であれば、オリジナル作品を傷つけることなく、様々な空間を再現することが可能になります。

大塚国際美術館では、この利点を活かし、作品をより深く理解するための展示方法を追求しています。

また、「系統展示」では、美術史の流れに沿って作品を展示することで、美術の変遷を分かりやすく学ぶことができます。

約 3 万平方メートルという広大な展示スペースは、常設展示としては日本最大級です。

驚くことに、ここには所蔵庫はありません。全ての作品が展示されているのです。

美術史を辿る、壮大なスケールを感じてください。

教育普及：誰もが美術を 楽しめるように

設立当初の「誰もが美術を楽しめるように」という想いは今でも引き継がれており、大塚国際美術館は、子どもから大人まで、誰もが美術を楽しめるように、様々な教育プログラムを提供しています。

鳴門市内の小学 4 年生を美術館に招待する“鳴門市小学4年生プログラム”は、子どもたちに驚きと感動を与える特別な体験となっています。

中学生が主体的に学ぶことのできるワークシートや高校生が教科書に載っている作品を通じて探究心を深めることのできる鑑賞シートも用意されています。

これらの取り組みは、子どもたちに多くの美術に触れる機会を提供することで、感性を育み、豊かな心を育むことを目的としており、地域貢献にもつながります。

また、「#アートコスプレフェス」という面白いイベントも定期的に開催され、家族で楽しめる美術館となっています。

これは、ただ衣装を着て楽しむだけではありません。

お気に入りの絵画の登場人物になりきって、作品の世界に入り込む。

そうすることで、作品をより深く理解し、細部まで観察するようになる、という効果も期待されています。

そして今、それらの取り組みを通じて発信している想いは、国内の子どもたち向けだけでなく、国内外を問わず、より多くの人々に広がっています。

大塚国際美術館は、言葉や文化の壁を越え、誰もが自由にアートを楽しめる場所を目指しています。

そのために、多言語対応のキャプションや携帯式イヤホンガイドやパンフレットの制作など、様々な取り組みを行っています。

設立当初の「子どもたちに本物の美術に触れてもらいたい」という思いは、時を超え、国境を越え、今、世界中の人々へ向けられています。

陶板画：時空を超えた芸術の架け橋

Gogh “Seven Series Sunflowers” ©The Otsuka Museum of Art

陶板画は、もともとヨーロッパで生まれた技法です。

しかし、現代において、ヨーロッパの様々な作品を伝えるために、日本で陶板画が活用されているというのは、なんとも興味深いことです。

戦争で焼失したゴッホの「ヒマワリ」も、陶板で原寸大に再現され、大塚国際美術館で鑑賞することができます。

それも、現存する 6 点の「ヒマワリ」と、焼失した 1 点の、計 7 点が一度に鑑賞できるというから驚きです。

本来なら、もう二度と見ることができない作品を、時空を超えて現代によみがえらせます。

陶板名画は、そんな、美術の無限の可能性を秘めているのです。

大塚国際美術館では、単に作品を再現しているのではなく、美術史家などの専門家による厳正なチェックと監修、そしてオリジナル作品を所蔵する美術館や教会などの正式な許可を得て、陶板名画を製作しています。

「陶板名画」は、美術の感動を共有し、より多くの人々に身近にするための、大塚国際美術館の挑戦なのです。

大塚国際美術館：世界の名画と出会える場所

大塚国際美術館は、四国の玄関口である高松空港や徳島空港からアクセスしやすい場所にあります。

高松空港からは直通の高速バスが運行しており、スムーズに美術館へ行くことができます。

また、徳島空港からは、路線バスを利用してアクセス可能です。京都、大阪など関西方面からは、大塚国際美術館直通の高速バスも運行中です。

国内外から来場者が訪れやすいように、アクセスの良さにも配慮されています。

大塚国際美術館は、オリジナル作品の感動を、陶板名画という形で世界中の人々に届ける、ユニークな美術館です。

世界の名画を巡る旅へ、あなたも出発しませんか？

「写真は大塚国際美術館の展示作品を撮影したものです」

時空を超えた芸術の旅：山口県立美術館

瀬戸内海の隠れた宝石、山口市へ

ニューヨークタイムズ紙が選ぶ「行くべき 52 カ所」に選ばれたこともある山口市。瀬戸内海を南に望むこの穏やかな街は、豊かな自然と歴史、そして文化が美しく調和した、まさに「日本の隠れた宝石」です。

瑠璃光寺五重塔や山口祇園祭など、多くの見どころがある山口市ですが、実は、日本におけるクリスマス発祥の地としても知られています。1552 年、日本で最初のクリスマスミサがここで行われたという史実は、古くから海外との交流があり、新しい文化を受け入れてきたこの街の精神を象徴しています。

山口の歴史と文化が息づく美術館

街の中心部に佇む山口県立美術館は、そんな山口の歴史と文化を肌で感じることができる場所です。室町時代の画僧・雪舟や江戸時代の雲谷派をはじめとする日本画、香月泰男、松田正平など山口県出身作家の油彩画、戦後日本の写真、版画、彫刻など、多様なコレクションを所蔵しています。

一歩足を踏み入れると、そこはまるで別世界。広々とした空間の中に、数々の名画が展示され、静かに語りかけてきます。

時空を超越する、畳敷きの展示室

中でも印象的なのは、畳敷きの展示室。畳の上に腰を下ろして作品を鑑賞することで、絵画と一体となるような、時空を超越した感覚を味わえます。まるで、伝統的な日本家屋の居間でくつろいでいるかのような、温かい雰囲気の中で、心ゆくまで芸術作品と向き合うことができます。

この畳の部屋は、地元の人々にとっても憩いの場。ひょっとしたら、隣に座った地元の人と、作品について語り合うことができるかもしれません。そんな予期せぬ出会いも、この美術館の魅力の一つです。

展示内容は時期によって異なりますが、掛け軸や屏風など、室町時代から近現代までの日本画が展示されることが多いようです。畳と日本画の組み合わせは、日本の伝統的な美意識を体現しており、見る人の心を和ませます。

西の京と雪舟

重要文化財 雪舟等楊《山水図巻》(部分)1474 年 山口県立美術館蔵

雲谷庵(山口市天花)

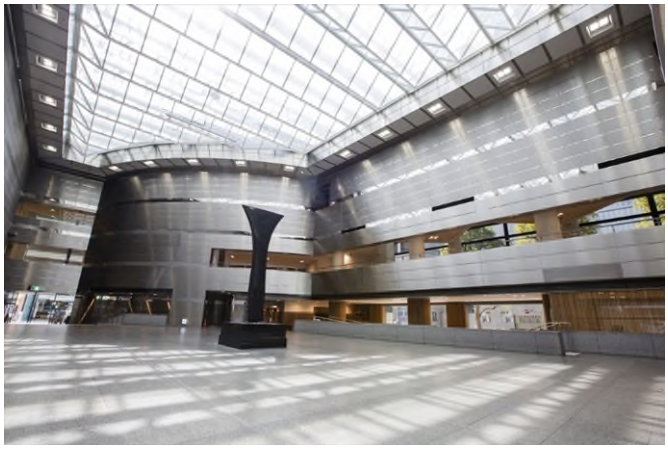
かつて、室町時代には「西の京」と呼ばれ、日本有数の守護大名・大内氏の治世において、京都に匹敵するほどの繁栄を誇った山口。水墨画の巨匠、雪舟もこの地で活躍しました。美術館の近くには、瑠璃光寺五重塔を望む、雪舟のアトリエ兼旧居「雲谷庵」(復元)もあります。雪舟は、国宝に指定されている作品数が日本最多の画家としても知られています。秋には、美術館で重要文化財3点をはじめ、雪舟の名品を紹介するコレクション展がよく開催されています。畳の部屋でおよそ 600 年前に制作された雪舟の作品を鑑賞すれば、いにしえの時代にタイムスリップしたかのような、特別な体験ができるでしょう。

地域と共にある美術館

山口県立美術館は、地域社会との繋がりも大切にしています。地元の企業や団体、寺社などと連携した様々なプログラムを通して、文化・芸術の振興に貢献しています。私が訪れた際、地元のパン屋に展覧会ポスターが貼られているのを見かけました。これは、美術館が芸術を誰もがアクセス可能なものにしようとする努力を示しています。美術館と地域社会の密接な関係は、美術館の壁を越えて広がる、温かい雰囲気を作り出しています。

山口県立美術館は、単なる美術館ではありません。歴史、文化、そして芸術が織りなす、特別な空間です。ぜひ、あなた自身の目で、その魅力を確かめてみてください。

市民に愛され、未来へ繋がる美術館：高松市美術館



香川県高松市の中心部に位置する高松市美術館。

街の喧騒から一歩足を踏み入れると、そこは静寂の世界。

広々とした空間に、様々な時代やジャンルの美術作品が展示され、訪れる人々を魅了しています。

しかし、高松市美術館の魅力は、美術作品だけではありません。

その歴史を紐解くと、そこには、市民の熱い思いと、未来へ繋がる芸術への情熱が込められているのです。

戦後、市民の募金で生まれた美術館

1949 年、終戦からわずか 4 年。焼け野原から立ち上がり始めた高松市に、一際輝きを放つ文化施設が誕生しました。

それは、高松市美術館。地方の公立美術館として全国に先駆けて誕生したのです。

驚くべきことに、この美術館は、地元アーティストたちによる建設運動や小中学生からの募金などによって、後にミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで三つ星として紹介されることになる栗林公園内に建てられました。

当時、芸術や文化は、人々の心を癒し、未来への希望を与える力になると信じられていたのでしょう。

地元アーティストの芸術への情熱と子どもたちの純粋な思いが、美術館設立の原動力となったのです。

もしかしたら、この美術館こそ、香川県が「アート県」と呼ばれるようになった最初のきっかけだったのかもしれません。

讃岐漆芸：高松の誇る、美と技の結晶

磯井如真《蒟醤 筆筥 銀葉アカシア之圖》1957 年 高松市美術館蔵

高松市美術館のコレクションの中でも、ひときわ輝きを放つのが、讃岐漆芸の作品群です。

江戸時代から続く讃岐漆芸は、高松藩の庇護のもと、独自の展開を遂げてきました。

地元の人々にとっては、贈答品や日用品として、暮らしに馴染み深いものとなっています。

一方、中国や東南アジアの漆器から研究を重ね、磨き上げてきたその技術は、世界でも高く評価されています。

漆の表面に細かい模様を彫り込んだり、何層にも漆を塗り重ねたり、色漆で絵を描いたり様々な技法を駆使することで、一つひとつが立体感と深みのある、美しい作品に仕上がります。

手間を惜しまず、漆の持つ美しさを最大限に引き出す、まさに匠の技。

高松市美術館所蔵の讃岐漆芸作品がオランダのアムステルダム国立美術館の展覧会で紹介されたこともあります。

高松市美術館は、人間国宝の作品を含む、貴重な讃岐漆芸作品を多数所蔵しています。

これらの作品は、美術品としての価値だけでなく、高松・香川の歴史と文化を伝える、かけがえのない宝物です。

現代美術への先見性

撮影：宮脇慎太郎

高松市美術館は、1988 年に現在の場所に移転し、新たなスタートを切りました。

瀬戸大橋開通と同じ年に開館したこの美術館は、当時、まだ国内ではそれほど注目されていなかった日本の現代美術を積極的に収集し始めました。

それは、まさに先見の明と言えるでしょう。

現代美術は、時代を反映し、私たちに新たな視点を与えてくれます。

高松市美術館のコレクションは、日本の現代美術の流れを理解する上で、重要な役割を担っています。

バブル経済期の当時、美術館は、当時価格が高騰していた人気の高い印象派などの絵画を購入するのは難しい状況でした。

しかし、彼らは、未来を見据え、まだ多くの人が気づいていなかった現代美術に目を向けたのです。

その決断が、今日の高松市美術館の礎を築いたと言えるでしょう。

誰もが美術を 楽しめる場所

高松市美術館は、開館以来、教育普及活動にも力を入れています。

その象徴とも言えるのが、「こども＋（こどもアートスペース）」です。

ここは、子どもたちにとって創造力を育む、夢のような場所。

明るい日差しが差し込む広々とした空間には、絵の具やクレヨン、色画用紙など、様々な画材が用意されています。

子どもたちは、自由な発想で、思い思いの作品作りを楽しむことができます。

「＋（プラス）」の名前の通り、ここは子どもだけのものではありません。

大人ももちろん利用可能です。

旅の途中で立ち寄って、思い出の作品を作ってみませんか？

高松市美術館の職員は、「旅人の方にも、ぜひ気軽に利用していただきたい」と話していました。

こども＋では、自由工作だけでなく、特別展にちなんだワークショップも開催されています。

例えば、版画や彫刻、絵画など、様々な技法を体験することができます。

作品を鑑賞するだけでなく、実際に自分で作ってみることで、アートへの理解を深め、より身近に感じることができます。

また、ワークショップを通して、地元の子どもたちと交流する機会もあるかもしれません。

言葉が通じなくても、アートを通して心を通わせる、素敵な体験になるのではないでしょうか。

街に開かれた美術館

高松市美術館は、街の中心部に位置し、市民にとって身近な存在です。

今では、多くの外国人観光客が、アートを求めて高松市美術館を訪れます。

彼らは、日本の現代美術や、地域に根ざした讃岐漆芸の魅力に惹きつけられているのです。

高松、そして香川県には、古くから文化や芸術を育んできた土壌があります。

高松市美術館は、その象徴として、これからも多くの人々に愛され続けるでしょう。

高松市には、美術館以外にも、アートな魅力が溢れる建物がたくさんあります。

例えば、香川県庁舎や百十四銀行本店は、その建築美で知られています。

美術館を鑑賞した後は、街を散策しながら、これらのアートな建物を巡ってみるのもおすすめです。

未来へ繋がる美術館

高松市美術館は、単なる美術作品を展示する場所ではありません。

市民に愛され、地域に根ざし、未来へ繋がる美術館。

それは、美術を通して人々を繋ぎ、心を豊かにする、かけがえのない存在です。

平和への祈りを込めて：広島市現代美術館

Photo: SATOH PHOTO Kazunari Satoh

かつて、原子爆弾の投下により、壊滅的な被害を受けた広島。

しかし、広島の人々は、その悲しみと苦しみを乗り越え、平和への願いを込めて、街を復興させてきました。

平和記念公園や原爆ドームは、忘れてはならない歴史を刻む場所です。

そして、比治山公園にたたずむ広島市現代美術館もまた、同様に広島の平和への祈りが込められた場所です。

平和の丘に建つ美術館

Photo: SATOH PHOTO Kazunari Satoh

広島市現代美術館は、1989 年に公立としては初の現代美術を冠する美術館として開館しました。

美術館が建つ比治山公園は、「平和の丘」として、市民の憩いの場となるように整備が進められてきました。

その丘の上に、黒川紀章氏設計による、印象的な建物が姿を現します。

建物の屋根の切れ込みは、爆心地の方向を向いており、平和への祈りが込められています。

黒川紀章の建築

Photo: Kenichi Hanada

広島市現代美術館は、世界的に有名な建築家、黒川紀章氏によって設計されました。

この美術館は、黒川氏が生涯にわたって提唱した「共生の思想」を実現した建築です。

美術館の建物は、周囲の自然と調和しながらも、存在感を放っています。

約 2 年 3 ヶ月にわたる改修工事休館を経て、2023 年にリニューアルオープンしました。

改修では、建物の老朽化対策に加え、現代美術の展示に対応するための改修が行われました。

また、設立当初から現在に至るまでに変化した美術館に求められる機能の強化にも対応しました。

具体的にはカフェの移設やワークショップなどをおこなう多目的スペースの増設など誰もが立ち寄りやすくなるような場所にすることです。

このように、美術館は、時代に合わせて変化し続けています。

しかし、黒川氏のオリジナルデザインは大切に保存され、かつて使われていた大理石を再利用するなど、歴史を継承する工夫が凝らされています。

広島では、被爆建造物の保存のために、被爆石を大切に保管しているケースが多く見られます。

それは、被爆の記憶を後世に伝え、平和への願いを繋いでいくためです。

ヒロシマとアート

Photo: SATOH PHOTO Kazunari Satoh

広島市現代美術館の収集方針のひとつに「ヒロシマと現代美術の関連を示す作品」があります。

ここで「ヒロシマ」をカタカナで表記するのは、単なる地名としての広島ではなく、被爆という歴史的な背景、そして平和への祈りを込めた特別な意味合いを持っているからです。

被爆地としての特徴を意識して語られる際、広島はしばしば「ヒロシマ」とカタカナで表記されます。

被爆という悲劇を経験した広島だからこそ、美術を通して平和を訴えかけることができます。

コレクション展では、約 1700 点の所蔵作品の中から、テーマごとに展示替えを行いながら、様々な角度から「ヒロシマ」に関連した作品を展示しています。

これらの美術作品は、過去の悲惨さを物語るだけでなく、現代の人々が「ヒロシマ」とどのように向き合っているのか、未来へ向けてどのようなメッセージを発信しているものもあります。

中には、「ヒロシマ」というテーマで制作委託をした作品もあるそうです。

地域との共存

Photo: KAZE

Photo: KAZE

広島市現代美術館は、地域住民にとっても、身近な存在です。

併設のカフェ「KAZE」では、地元の食材を使ったメニューを楽しむことができます。

「KAZE」の魅力は、地元の食材へのこだわりです。

広島市内に点在するパン屋さんやフルーツショップ、コーヒーロースターなど、様々なお店から、選りすぐりの品々が集まってきます。

それはまるで、広島の美味しいものが一堂に会する、食のギャラリー。

カフェで提供されるパンやフルーツ、コーヒーを味わうことで、広島の食の魅力を満喫できる、まさに「広島の縮図」のようなカフェと言えるでしょう。

たとえ、芸術作品に触れることを主目的にしなくても、「KAZE」で広島の味覚を堪能したり、比治山の自然の中でくつろいだりするだけでも、訪れる価値は十分にあります。

さらに、「KAZE」では、デリバリーサービスも行っています。

比治山の公園内で、お気に入りの場所を見つけて、広島の景色を眺めながら、カフェを楽しむこともできます。

また、広島に長く滞在する旅行者にとっては、原爆ドームなどからも、まるで地元住民のように散歩感覚で比治山へ訪れることができます。

G7 広島サミットにおいて、各国首脳が広島平和記念資料館を訪れた際に残した「平和へのメッセージ」を記す碑も見ることができます。

美術を通して平和を想う

被爆から長い期間が経ちましたが、広島市現代美術館は、美術を通して平和を考え、未来へ繋がる美術館です。

ぜひ一度訪れて、美術が持つ力、平和の大切さを、改めて感じてみてください。